

## パトナムの「水槽の中の脳」について

島田祥子\*

### 1・水槽の中の脳とBIV仮説

水槽の中の脳という懐疑論的仮説は、一般には以下のようなものである。私やあなたの複製された脳が栄養液で満たされた水槽の中にあり、神経末端に電気 - 化学的な刺激を与えるコンピューター制御装置に繋がれている世界を想像してみよう。制御装置から送られてくる刺激のパターンが、現実の私の脳が受け取る刺激のパターンと同一であるならば、私と複製された脳は同一の経験と思考をもつことになる。私は自分が水槽の中の脳であるとは思っていないが、複製された脳も同様に自分が水槽の中の脳であると思っていない。このように、もし私が水槽の中の脳であっても、すべて私と同じ経験や思考をもつならば、いま私が水槽の中の脳ではないと信じる根拠はあるのだろうか。

ヒラリー・パトナムは、水槽の中の脳という仮説の一変形を *Reason, Truth and History* の第1章 (Putnam [1981], pp.1-21) で批判的に検討している。パトナムが検討する仮説では、世界に存在するのは上記のような脳と培養液で満たされた水槽と制御装置だけであり、意識をもつ存在者はすべて最初から水槽の中の脳である。水槽の中の脳は、ある脳が別の脳に“話し掛ける”と、別の脳がその声を“聞く”というように、集合的な“経験”をもつ。この仮説を特に“BIV仮説”と呼び、このときの水槽の中の脳を“BIV”と略記することにしよう。BIV仮説は、ただ誰かが自分の境遇について欺かれているという状況ではなく、意識をもつ存在者すべてが、自分たちの境遇についても、世界のあり方についても、根本的に間違った信念をもつような状況を表している。もしBIV仮説が正しければ、私たちは脳以外の身体をもたないし、日常的に見聞きしている世界の事物も殆どすべて存在していない。しかし、BIV仮説の真偽を私たちは経験的手段によって確かめることはできない。

パトナムは、このBIV仮説が実際に成り立つ可能性はない、つまり私たちが現実にBIVであることはありえないと主張する。彼の論証の骨格は以下のようなものである。

- (1) もしBIV仮説が正しいならば、指示の基本的な前提条件によって、BIVは自分たちがBIVであると言ったり考えたりすることができない。
- (2) BIVが自分たちはBIVであると言ったり考えたりできないということは、BIV仮説が“自己反駁的 self-refuting”であるということである。
- (3) 自己反駁的な想定は必然的に偽である。
- (4) 従って、BIV仮説は必然的に偽である。

論証のステップ(1)~(3)は、それぞれ検討を要する。(1)は「何かについて考えること、何かを表象すること、何かを指示すること等々の前提条件」(Putnam [1981], p.16)についての考察をBIV仮説に適用することから得られるが、この指示についての前提条件を懐疑論論駁に利用することを批判する反論がある。(2)で導入される“自己反駁的”という概念については、パトナムの挙げる他の自己反駁的な仮説の例とBIV仮説が同種のものであるかどうかが問題になる。また(3)の「必然性」の性格付けが議論と批判の対象になっている。

そこで本論ではパトナムの論証を幾つかの批判的意見と併せて検討し、どの程度まで擁護できるのかを見積もりたい。論証の(1)は第2、3節で扱い、指示の前提条件を懐疑論論駁に利用することへの批判は別に第4節で扱う。

---

キーワード：パトナム、懐疑論、指示の理論

\*平成7年度生 比較社会文化学専攻

論証の(2)は第5節で、(3)は第5節の後半と第6節で扱う。

## 2・指示の基本的な前提条件

まずパトナムの考える指示の基本的な前提条件を概観してみよう。以下の二つが前提条件である。

- (a)指示の魔術説の拒否：「物理的表象物 physical representations にそれが表現するものとの必然的な結びつきがないように、心的表象物 mental representations にも、それが表現するものとの必然的な結びつきはない」(Putnam [1981], p.3)
- (b)指示の因果的制約：「ある種の事物、例えば樹木、ないしそうした事物をそれによって記述することができるような事物と因果的相互関係を一切もたない人には、それらの事物を指示することができない」(Putnam [1981], pp.16-17)

“指示の魔術説”とは〈表象物 representations はそれが表現するものと必然的な結びつきをもつ〉あるいは〈表象物は独力で特定の対象を指示することができる〉といった考え方をいう。魔術説は、文字や音声による言語表現や絵などの物理的な表象物については、明らかに正しくない。名前のような言語表現は、それが表す対象と「文脈的・偶然的・規約的な結びつき」(Putnam [1981], p.3)しかもたない。文字列や音が単独で特定の対象を表すという考え方は呪術的である。また、絵や写真については、それらが対象に類似しているということによって対象を表すという考え方を、パトナムは魔術説として斥ける。パトナムが例に挙げる、アリの這った跡がたまたまウィンストン・チャーチルの似顔絵のようにになっている場合のように、ある対象と全く関わりなく描かれた「絵」は、たとえその対象に似ているとしても、その対象を表すものであるとはみなされない。パトナム自身は直接に論じていないが、写真についても、双子の一人を映した写真は、もう一人にどれだけ似ていても、そのもう一人を表しているとはいえない。つまり、絵や写真が単独にもつことのできる性質（色の配置や形など）に基づいて、それに類似しているということによって、絵や写真が表す対象を特定することはできない。

パトナムは、物理的な表象物についての論点が、心的な表象物についても当てはまると主張する。つまり、心的イメージや心に思い浮かぶ言葉、あるいは概念は、それらが表現するものと必然的な繋がりをもたない、ということである。これは奇妙な主張であるように思われる。なぜなら、私が（例えば）樹木について考えているとき、それが樹木についての思考であることは、私がそのように考えているという以上の論拠を必要とするとは思われないからだ。しかし、パトナムはこれが自明のことではないと主張する。まず心的イメージについては、物理的な絵の場合と同じ議論が適用できる。私が樹木について考えるとき、典型的な樹木のイメージを思い浮かべることがあるが、ただそのようなイメージを心にもつというだけでは、樹木について考えているとみなすのに不十分である。なぜなら、質的に同一の心的イメージをもつていても、樹木について考えているとみなすことができない事例がありうるからだ。例えば、樹木が一本も存在したことのない惑星に、人間と同様の生理的機能をもつ異星人が存在するとき、彼らが何らかの偶然によって色インクが紙の上に散らばった形を見て、私たちが樹木を見るときに得るのと質的に同一のイメージを彼らの心に思い浮かべても、そのイメージが樹木を指しているとはいえない。その異星人が他のものではなく樹木について考えているともいえないだろう。また、樹木のもつという場合にも、例えば「樹木」という言葉を心に思い浮かべるだけでは不十分である。パトナムは、概念をもつということは、心に生起する出来事ではなく、正しい文脈において文や語を用いたり、質問に適切に答えたりする能力をもつということだと考える (Putnam [1981], p.18-20)。従って、心に「樹木」という言葉を思い浮かべていても、樹木に関する質問に適切な仕方では答え、樹木が目の前にあるときに「そこに樹木がある」と発言するなどの行為を示すことができなければ、私は樹木について考えているのだとはいえない。

概念をもつことに関する議論は、指示についてのもう一つの基本的条件にも関わる。指示の魔術説を拒否するならば、物理的・心的表象物はそれが表す対象と必然的な繋がりをもたないことになる。では、私たちが樹木について考えたり、私たちの発話が樹木を指示したりすることが可能なのは何によってなのだろうか。パトナムは、それを“指示の因果的制約”によって説明する。日常的な状況において、ある人が何を考えているのかということは、その人が因果的繋がりをもつ事物に部分的に依存している。ある人が（例えば）樹木と適切な仕方では因果的繋がりをもつことができなければ、その人の思考や使用する語句が樹木を指すものだと解釈することはできない。私たちの発話や思考が樹木を指示できるのは、私たちが樹木を見たり、触ったり、植えたりすることで、

樹木と因果的な関わりをもち、樹木と因果的に関わる私たちの非言語的な行動が、「樹木はどこにあるか」と問うことや「昨日、樹木を二本庭に植えた」という発話などの「樹木」という語を使用する言語的行動と整合的に連関しているからである。従って、もし言語的な入力に対して適切な言語的出力を行うという形で言語能力をもつ機械があるとしても、その言語的入出力が、言語外の対象と因果的な繋がりのある非言語的な入出力（例えば、外界の変化に応じた運動や非言語的な形式でのデータの入出力）と整合的に連関していなければ、その機械は言語外の対象を指示するとはいえない(Putnam [1981], pp.8-12)。

### 3・BIVが指示できるもの

では、ここでBIV仮説に戻って、BIVの指示できるものがどのようなものであるのかを再考してみよう。

BIV仮説では、BIVが“私たちと同一の経験や思考”をもつとされる。しかし、指示の魔術説を拒否するならば、BIVが制御装置から受け取る刺激のパターンが、現実の私の脳が受け取る刺激のパターンと同一であるとしても、それだけではBIVと私が同一の経験と思考をもつということにならない。なぜなら、BIVが私と同じ質の心的イメージや心に浮かぶ言葉としての“思考”をもつだけでは、BIVのイメージや思考が、私のイメージや思考と同一の対象を指示しているとはいえないからだ。

さらに、指示の因果的制約を受け入れるならば、BIVの発話や思考の内容はかなり制限される。ここで、BIVが発話する「私たちは水槽の中の脳である」という文を解釈することを考えてみよう。そのためには、BIVによる「水槽」や「脳」という語の使用がどのような対象と因果的な繋がりをもつのかを考えなくてはならない。BIV仮説では、BIVの世界に実在する脳とは彼らBIV自身であり、実在する水槽とは彼らが入っている水槽一つである。しかし、BIVが得ることのできる“脳を観察する経験”や“水槽を持ち上げる経験”は、コンピューター制御装置から送りこまれる刺激によるものであり、実際に脳を見たり水槽を持ち上げたりするといった、脳や水槽と因果的に関わる非言語的な行動によって得られたものではない。確かに、もし脳や水槽がなければ、BIVが自動制御装置を介した“経験”をもつことはそもそもなかったという意味で、実在する脳や水槽とBIVの“経験”に因果的な繋がりがあるといえる。しかし、それはBIVのあらゆる“経験”についていえることである。ここでは、反事実的条件によって因果関係を分析することの当否以前に、BIVの言語使用の原因となる“経験”が水槽や脳の実際の状態と無関係にコンピューターによって生み出されるために、BIVの言語使用と実在する脳や水槽の間には指示関係を裏付けるのに十分な因果的な繋がりがないということに注目しなくてはならない。以上のような論拠から、BIVは「水槽」や「脳」という語を使用しても、彼らの世界に実在する水槽や脳を指示することはできない。従って、BIVは、彼ら自身がBIVであると言ったり考えたりすることもできない。この結論は、見てきたように、BIV仮説と指示の基本的な前提条件から単純に導かれているので、パトナムの論証(1)は正しいと認められるだろう。

ではBIVは「水槽」や「脳」という語を用いて何を指示することができるのだろうか。パトナムは、BIVが（例えば）「樹木」という語を使用するとき、この語の使用と適切な因果的繋がりがあり、指示対象となりうるのは、〈樹木のイメージ〉あるいは〈樹木を“見る”“触る”といった“経験”の原因となっている電気 - 化学的的刺激〉あるいは〈こうした電気 - 化学的的刺激の原因となっているコンピューター制御装置のプログラム構造〉などが考えられるという (Putnam [1981], p.14)。同様の議論によって、BIVが用いる「水槽」の指示対象となりうるのは〈水槽のイメージ〉あるいは〈水槽の“経験”の原因となる電気 - 科学的刺激〉、あるいは〈それらの原因となっているコンピューター制御装置のプログラム構造〉ということになる（「脳」についても同様である）。従って、BIVが「私たちはBIVである」という文を発話することで表現できるのは、彼らが〈水槽の中の脳 - イメージ〉である、あるいは〈水槽の中の脳 - イメージの原因となる電気化学的刺激〉である、あるいは〈それらの原因となるプログラム構造〉であるということになる(Putnam [1981], pp.14-15)。

### 4・指示の基本的な前提条件と懐疑論

しかし、懐疑論的仮説を議論する文脈で、パトナムが挙げた指示の前提条件を利用することは、果たして適切なのだろうか。指示の魔術説を拒否し、指示の因果的制約を受け入れるならば、私たちが実際にどのような対象と因果的なやり取りをしているのか明らかにならない限り、私たちがどの対象を指示しているのか分からないと

認めなければならないだろう。ただ「私たちは水槽の中の脳だろうか」といった文を心の中に思い浮かべたり、発話したりするだけでは、私たちが実在する脳や水槽のことを考えている保証にはならない。なぜなら、もし私たちが実際にBIVであるならば、同じ「私たちは水槽の中の脳だろうか」という字面の文を使用している、それによって実在する脳や水槽のことを指示することはできないし、それらについて考えているともいえないからだ。私たちがBIVではないということを示すためには、私たちが水槽や脳を指示できるような文脈において「私たちは水槽の中の脳である」という文を用いた主張が偽であることを示さなくてはならない。しかし、パトナムのいう指示の基本的な前提条件を認めるならば、私たちが水槽や脳を指示できる文脈において発言しているという仮定は、私たちが少なくともBIVではないということを含意することになる。従って、私たちが実際にBIVであるかどうかを問題にするとき、このような指示についての前提は論点先取である。指示についての前提に基づくパトナムの議論には根本的な欠陥がある。BruecknerやMcIntyre、Isemingerは、このようにパトナムの議論を批判する(McIntyre [1984], pp.59-60; Brueckner [1986], pp.165-167; Iseminger [1988], pp.193-194.)。

これに対して、DaviesやEbbsは、私たちが使用する言語表現の指示について、Bruecknerらのように懐疑的な態度を取ることはできないと主張する。もし私たちが「脳」や「水槽」で何を指示しているのかを、まず最初に独立した論証で示さなければならないとしたら、そもそもどのようにしてBIV仮説についての議論を始めることができるだろうか。BIV仮説を述べるためには、ただ「脳」や「水槽」という語に言及するだけではなく、これらの語を使用しなくてはならない。懐疑論が解決されるまでは、私たちが「脳」や「水槽」という語で何を指示しているかを私たち自身も知っているとはいえないので、「私たちは水槽の中の脳である」という文の意味することを知らない、あるいはこの文を理解していないことを前提して議論を進めるべきだという主張は、意味や思考についての日常一般の考え方をとるかぎり不合理である。もしパトナムのいう指示の前提条件が意味や思考についての日常的な考え方に含まれているのであれば、パトナムが論点を先取しているという批判は的外れである。むしろBruecknerらは、指示の魔術説が拒否されることや指示の因果的制約が、私たちの意味や思考についての日常的な考え方に実際に含まれているかどうかを問題にするべきではないか (Davies [1995], pp.220-223.; Ebbs [1995], pp.240-242, 251-252; Tymoczko [1989], pp. 284-286)。

指示についての前提条件を用いた議論が論点先取であると批判するBrueckner、Iseminger、McIntyreの論考には、指示の魔術説を拒否することや指示の因果的制約が私たちの日常的な言語理解に含まれていないという議論は見当たらない。また、何らかの理論的考察に基づいて、そうした前-理論的な前提条件を斥ける理由が述べられているわけでもない。彼らがパトナムの論証を批判する根拠は、私たちがBIVであるという懐疑論的仮説のもつ直観的な説得力が、指示についてのパトナムの議論よりも優っているという(明言されていない)考えにあるのかもしれない。あるいは、日常的な言語理解において指示の前提条件が働いていることを認めるが、懐疑論という文脈ではそれを一時的に棚上げすることが必要だと考えているのかもしれない。どちらにせよ、懐疑論を成り立たせるために指示の前提条件を否定するのであれば、それはパトナムの議論に対する反論として有効ではない。

パトナムのいう指示の基本的な前提条件が、私たちの日常的な言語実践において、発話や信念の内容を決定するときに機能していることは、第2節で挙げた幾つかの例から見ても、否定することが難しい。日常的な場面で「私たちは水槽の中の脳なのだろうか」と発言する人が、水槽や脳について考えているのかどうかを判定しようとするとき、私たちが指示の基本的な前提条件に訴える。この文を用いても、脳や水槽について考えていないと判定される人が私たちの中にある可能性はある。例えば、ある人が「水槽」によって植木鉢を、「脳」によって球根を指していると判断されるのに十分な言語行動と非言語的な行動の連関をもつことが判明すれば、その人が「私たちは水槽の中の脳なのだろうか」と発言しても、脳や水槽について考えていないとみなされるだろう。BIVが「私たちは水槽の中の脳なのだろうか」という文を心の中にもつだけでは水槽や脳について考えているといえないとパトナムが指摘するとき、その脳や水槽とは、指示の基本的な前提に基づいて、私たちが「脳」や「水槽」という語によって指示できるもののことである。それ以外のどのような水槽や脳について、私たちが有意味に話すことができるだろうか。BIVが脳や水槽を指示できないとは、彼らの「脳」や「水槽」という語の使用が、仮説により、私たちに指示できる水槽や脳と十分な因果的な繋がりをもたないために、それらを指示できないということである。従って、BIV仮説によって私たちの日常的な言語使用による指示が危うくなることはない。

## 5・「自己反駁的」という概念

BIVは彼ら自身がBIVであると言ったり考えたりすることができないということから、私たちが実際にBIVであるという可能性はないという結論を導くパトナムの議論は、明確であるとはいえない。パトナムは、“自己反駁的 self-refuting”という概念によって、私たちがBIVであるという想定が必然的に偽であるということを示そうと試みている。

パトナムは「自己反駁的」という語を二通りの仕方で定義している。第一の定義は「『自己反駁的な想定』とは、それが真であることがそれ自身の偽であることを含意するものである」(Putnam [1981], p.7) というものだ。例として「すべての一般的な言明は偽である」という想定が挙げられる。第二の定義は、「また〈そのテーゼが心に抱かれたり口に出されたりしているという想定〉が、そのテーゼの偽であることを含意するときに、そのテーゼを「自己反駁的」と呼ぶ」(Putnam [1981], pp.7-8) というものだ。こちらの例としては、「私は存在しない」という想定が挙げられている。

パトナムは、私たちがBIVであるという想定は自己反駁的であり、さらに、自己反駁的な想定は必然的に偽であると考えている。

【…】私たちが現実には水槽の中の脳であるという想定は、物理法則に違反せず、私たちが今まで経験してきたあらゆることと完全に両立するけれども、真であることは決してありえないと議論するつもりである。それが真であることは決してありえない。なぜなら、それはある仕方で自己反駁的だからである。(Putnam [1981], p.7)

しかし、パトナムの定義による自己反駁的な想定が必然的に偽であるかどうか、議論の余地があると考えられる論者は多い。

第一の定義による自己反駁的想定は、

もし  $p$  ならば  $\neg p$ 、従って  $\neg p$

という形式の妥当な論証によって、論理的に、従って必然的に偽であると示すことができる (Iseminger [1988], p.191)。私たちがBIVであるという想定が、第一の定義による自己反駁的な想定であるならば、それは文句なしに必然的に偽であるといえるだろう。しかし、パトナムの叙述は、第一の定義ではなく、むしろ第二の定義に沿っているように見える。

もし【…】私たちが本当に水槽の中の脳であるならば、私たちが「私たちは水槽の中の脳である」で意味することは、(もし私たちが何かを意味できるのであれば)、〈私たちは水槽の中の脳 - イメージである〉というようにことである。しかし、私たちは水槽の中の脳であるという仮説の一部には、私たちが水槽の中の脳 - イメージではないということが含まれている (つまり、私たちが「幻覚している」のは、私たちが水槽の中の脳だということではない)。従って、もし私たちが水槽の中の脳であるならば、「私たちが水槽の中の脳である」という文は (もしそれが何かを述べているのであれば) 偽であることを述べている。要するに、もし私たちが水槽の中の脳であるならば、「私たちは水槽の中の脳である」は偽である。従って、それは (必然的に necessarily) 偽である。(Putnam [1981], p.15)

第3節の議論から、BIVが「私たちは水槽の中の脳である」という文を用いて行う主張の真理条件は〈BIVが水槽の中の脳 - イメージである〉(あるいはそういうイメージの原因となる電気 - 化学的刺激である、あるいはそれらの原因となるプログラム構造である) だと考えられる。しかし、BIV仮説の述べるところでは、BIVはイメージではないし、電気 - 化学的刺激でもプログラム構造でもない。従って、この真理条件は満たされていない。従って、BIVによる「私たちは水槽の中の脳である」という文を用いた主張は偽である。

しかし、ここで問題になっている

もし私たちが水槽の中の脳であるならば、「私たちは水槽の中の脳である」は偽である。

という主張は「もし  $p$  ならば  $\neg p$ 」という形式ではないと思われる。なぜなら、前半の「私たちが水槽の中の脳である」と、後半の「私たちは水槽の中の脳である」は、異なる内容を表現していて、 $p$  に当てはまるような単一の命題がないからだ。指示の魔術説を否定し、因果的制約を受け入れるならば、前半の仮定はBIVには考えたり表現したりできない内容である。これに対して、後半に引用された文が偽であるとされるのは、この文がBIVによって用いられたときの解釈による、BIVが表現できる内容に基づいている。従って、この主張は、少なくとも、第一の定義でいう自己反駁的なものではない(McIntyre [1984], pp.60-61; Brueckner [1986], p.152; Iseminger [1988], pp.191-192)。

では、私たちはBIVであるという想定は、第二の定義でいう「〈そのテーゼが心に抱かれたり口に出されたりしているという想定〉が、そのテーゼの偽であることを含意する」性質をもつのだろうか。パトナムは以下のような推論をしていると思われる。

- (i) 私たちは、私たちがBIVであるという仮説を考えることができる。
- (ii) もし私たちがBIVであるならば、指示の基本的な前提条件によって、私たちは私たちがBIVであるという仮説を考えることができない。
- (iii) 私たちはBIVではない。

第4節で論じたように、指示の基本的な前提条件を私たちの発話や思考に適用することによって(i)が疑わしくなるという立場をとる論者がいるが、彼らの論拠はあまり強いものではなかった。パトナムは、私たちの日常的な言語理解のあり方に訴えており、その限りでは(i)を疑うことは難しいと思われる。(ii)は第2、3節の議論によって認められるだろう。この(ii)には、BIVによって発話されたと解釈しなくてはならない文の引用が含まれていないので、先ほどのような多義性の問題は生じない。そこで、(i)と(ii)から(iii)を導出することができる(Tymoczko [1989], pp. 281-282; Ebbs [1992], pp. 239-240)。指示についての基本的な前提を受け入れ、私たちがBIVであるという仮説を考えることができると認めるならば、私たちがBIVではないこと、つまり私たちがBIVであるという仮説が偽であることが導出できる。従って、BIV仮説は自己反駁的な想定第二の定義に合致しており、さらにこの仮説が偽であることも示されたといえる。

さて、この第二の定義での自己反駁的な想定が「必然的に偽」であるというのはどういうことなのだろうか。パトナムは、先の引用(Putnam [1981], p. 7)で見たとおり、私たちが水槽の中の脳であるという事態の記述が、物理的な法則と両立することを認める。つまり、物理的に可能な事態の記述が、それでもなお、ある意味で「必然的に偽」であるというのがパトナムの主張であるようだ。ここでパトナムが考えているのは、少なくとも形而上学的必然性でも論理的必然性でもないと考えられる。論理的に不可能であることが物理的に可能であることはない。また、ある事態が成立しないことが形而上学的に必然的であるならば、その事態が物理的に可能であるとはいえないだろう。パトナムが「必然的に」という語をどんな意味で使用しているのか説明することは難しいが、上記のような根拠から、ここでは形而上学的な議論にコミットする意味ではなく、「私たちはBIVである」という文を用いた主張は“誰が行なっても必ず偽になる”ことを単に強調するために使用していると考えてみるができるのではないだろうか。

Daviesは、BIV仮説が一種の語用論的パラドクスであるということを示すように、パトナムの議論を再構成した。彼は、主張の前提条件に違反することによって、その文を用いた主張が偽になる文を「語用論的に自己反駁的 pragmatically self-refuting」と呼ぶ。パトナムが例に挙げた「すべての一般的言明は偽だ」「私は存在しない」や、あるいは「私はいまここにはいない」といった文は語用論的に自己反駁的である。「私」や「ここ」などの指標詞(indexicals)の指示対象は、発話の文脈によって異なるが、この文を発話する人の言うことが偽であることを知るために、発話の言語的文脈についての特定の知識は必要ない。例えば「私は存在しない」という文を用いた主張は、主張が必ず誰かある話者によって行われるという条件に抵触するために、誰がその文を用いて主張をしても、必ず偽である。「私は水槽の中の脳である」もまた語用論的に自己反駁的な文の一つである。この文を用いた主張

は、指標詞が使用されていることよりも、むしろBIV仮説が言語使用の文脈に特殊な影響を与えることによって、主張についての基本的な条件に抵触している。Daviesの分析によると、ある言語Lの文「私は水槽の中の脳である」を使用するある話者の主張が真であるのは、以下の二つの条件をその話者が満たすとき、かつそのときのみである。

- (i) その話者の状況がLの述語「xは水槽の中の脳である」によって外延表示(denote)される。
- (ii) その話者による「私は水槽の中の脳である」という発話は、Lにおける発話である。

しかし、条件(i)を満たす者は、指示の基本的な前提条件を受け入れるならば、言語Lの「水槽」や「脳」が指示するものを、「水槽」や「脳」を用いて指示することができない。従って、条件(i)を満たす者は、条件(ii)を満たすことができない。どんな話者も条件(i)・(ii)を共に満たすことはありえないので、「私は水槽の中の脳である」という主張が真となることもありえない。これは話者が私たちであっても、BIVであっても、同様に適用できる説明である<sup>(1)</sup> (Davies [1995], pp.216-218.)。

パトナムの指示に関する議論が、語と対象の関係としての指示よりも、話者が語を使用して対象を指示する行為を強調しているのを考慮すれば、文を用いた主張の条件とその真偽に焦点を当てたDaviesの再構成は適切であると思われる。しかし、パトナムの論証の実質が、BIV仮説を主張すると、その主張は語用論的パラドクスであるがゆえに必ず偽になるということなのだとすれば、私たちがBIVであることはありえないというパトナムの主張が、懐疑論論駁となりうるのかという疑問が生じる。なぜなら、懐疑論者はBIV仮説の形而上学的な可能性を問題にしようとするからだ。

## 6・懐疑論者の比喻による議論

「脳」や「水槽」によって指示されているのは私たちが日常的に知っている脳や水槽である、と解釈することは、懐疑論者が問題にしようとしていることを回避しているように見える。なぜなら、私たちがこの世界の私たちに指示できる水槽の中の脳であるかどうかを、懐疑論者は問題にしていないと思われるからだ。BIV仮説を考察することによって、BIVには自分たちがBIVであるという真理を知ることができないということが分かった。BIVには自分たちがBIVであるという仮説を表現することができないし、そうした仮説を検証することもできない。懐疑論者は、そのようなBIVと、彼らより認識的に優位の立場にあり、彼らの立場を表現できる私たちとの対比に注目する。つまり、以下の(A)と(B)の対比が問題なのである。

- (A) そのコンテキストにおいて可能な限り最大限に合理的であるような思考者によっても、ある特定の真理を知ることができないコンテキスト
- (B) 認識的に下位のコンテキストについて考えることができ、その欠陥を正確に記述できる、認識的により上位のコンテキスト (Forbes [1995], pp.219-220)

BIVと私たちとの対比を理解できるならば、この対比を一般的なものとして拡大できるのではないか。BIV仮説を考察するときには、BIVが(A)の立場にあり、私たちは(B)の立場にある。そこから敷衍して、私たちが(A)の立場にある可能性を考えることができる。もちろん、そのときに(B)の立場から私たちの境遇を正確に記述することは、私たちには不可能である。しかし、BIVに把握できない真理が存在するように、私たちにはその詳細を把握できない、私たちや世界に関する真理が存在するといえるのではないか。パトナムの論証はこのような形而上学的可能性を排除したわけではない(Smith [1984], pp.121-122; Wright [1992], pp.238-240)。

しかし、懐疑論者の強調する対比は、意図された役割を果たしていないように思われる。なぜなら、BIVが知ることができない真理を私たちが知ることができるということによって、初めて二つの認識的立場の対比が成り立つからだ。私たちとBIVの認識的立場は、私たちの科学理論の内部で区別できる。まず私たちの日常的な世界の理解と科学理論があり、そこから“私たちと質的に同一の経験”だけが残るように世界の事物を差し引いてきたのが、BIV仮説だからだ。そのように仮説を作っておきながら、改めて私たちが実際にBIVであるかもしれな

いと本気で疑うことには不合理なところがある(Tymoczko [1989], p.290)。また、もし懐疑論者の対比が、BIVと私たちとの対比と類比的であり、私たちに理解可能であるならば、私たちが知ることのできない真理といっても、原理的にはいずれかの認識者には知ることのできる真理であるはずだ。だから、懐疑論者は、BIVと私たちとの対比に訴えるだけでは、原理的に認識不可能な真理があるという主張を裏付けることはできない (Davies [1997], p.58)。懐疑論者は、私たちの可能的な状況として彼らが呈示すべきものを、あくまで比喩的に述べるに留まっている。しかし比喩だけによって意図する結論を導出することはできないだろう。

## 7・パトナムの論証に残る問題

パトナムの論証は、ステップ(1)と(2)を認めるとしても、(3)には批判的な議論の余地がある。指示の魔術説の拒否と指示の因果的制約という二つの基本的な前提を正面から否定することは難しい。この前提から、BIVが実在する水槽や脳を指示することができないこと、さらにBIVが「私たちはBIVである」という文で主張できる内容は偽であることを導くパトナムの議論に構造的な欠陥はないと思われる。しかし「必然的に」という語を使用するパトナムの意図が曖昧なために、私たちがBIVであることは不可能であるという結論を導く部分の議論は、懐疑論者を説得するには不十分だろう。懐疑論的仮説が、私たちの世界についての既知の理論から要素を抜くことによって作られているとしても、それが現実になり立つことが不可能であると結論するためには、語用論的な議論だけでは説得力を欠くように思われる。パトナムは、自身の議論をカントの「超越論的」研究になぞらえ、「ア・プリオリ」な推論と性格付けている(Putnam [1981], p.16)。これが「必然的」という語の特殊な使用にどのように関連するのかという問題は興味深い、本論の範囲を超えている。今後の研究課題としたい<sup>(2)</sup>。

## 注

<sup>(1)</sup>Daviesの再構成では、パトナムと違い、終始「私」という単数一人称が用いられているが、主張の条件を論じる議論の根幹に相違は生じないと判断して、そのまま引用した。

<sup>(2)</sup>本論は『論叢』の匿名講評に基づいて改稿されたものである。講評者の詳細かつ有益な助言に感謝申し上げたい。

## 引用・参考文献

- Brueckner, Anthony, [1986], "Brains in a Vat", *The Journal of Philosophy* vol.83, no.3, pp.148-167.
- Davies, David, [1995], "Putnam's Brain-Teaser", *Canadian Journal of Philosophy* vol.25, no.2, pp.203-228.
- Davies, David, [1997], "Why one shouldn't make an example of a brain in a vat", *Analysis* vol.57, no.1, pp.51-59.
- Ebbs, Gary, [1992], "Skepticism, Objectivity, and Brains in Vats", *Pacific Philosophical Quarterly* vol.73, pp.239-266.
- Forbes, Graeme [1995], "Realism and Skepticism: Brains in a Vat Revisited", *The Journal of Philosophy* vol.92, no.4, pp.205-222.
- Iseminger, Gary [1988] "Putnam's Miraculous Argument" *Analysis* vol.48, no.4, pp.190-195.
- McIntyre, Jane [1984] "Putnam's Brains", *Analysis* vol.44, no.2, pp.59-61.
- Putnam, Hilary, [1981], *Reason, Truth and History*, (Cambridge: Cambridge University Press)
- Smith, Peter, [1984], "Could We be Brains in a Vat?", *Canadian Journal of Philosophy* vol.14, no.1, pp.115-123.
- Tymoczko, Thomas, [1989], "In Defense of Putnam's Brains", *Philosophical Studies* vol.57, p.281-297.
- Wright, Crispin, [1994], "On Putnam's Proof that We Are Not Brains in a Vat", in *Reading Putnam* (P. Clerk and B. Hale (eds.)), Oxford: Basil Blackwell Ltd., pp.216-241.

(2002年1月21日受理)



## On Putnam's Brains in a Vat

SHIMADA Sachiko

Putnam claims in the first chapter of *Reason, Truth and History* that the skeptical hypothesis that we could be brains in a vat is a “self-refuting” supposition and cannot be true. His argument relies on the basic theoretical assumptions about reference. He argues from those assumptions that if we were brains in a vat, we could not say or think so. And the fact that we can and do think about the hypothesis implies that we aren't brains in a vat. Many critics find Putnam's argument unconvincing. Some argue that the assumptions about reference should not be used in refutations of skepticism. But I doubt that we could argue about something without any assumptions about reference. Putnam's assumptions seem reasonable and the critics haven't shown reasons enough to abandon them. Others claim Putnam's argument doesn't prove that “self-refuting” suppositions are “necessarily false”. Putnam does use the word “necessarily” in his argument, but he doesn't mean “metaphysically necessarily” by it. Davies argues that Putnam's argument shows that the skeptical hypothesis cannot be true because it violates preconditions for its assertion. The property “self-refuting” belongs to pragmatics of language. Davies' interpretation is convincing, but it undermines the strength of Putnam's argument.

Key word: Putnam, skepticism, theory of reference